2021/11/28中野教会「聖書の学び」

聖書個所：第一コリント16:21-24、ルカ福音書6:27-31、申命記27:24-26、

　　　　　申命記29:12-15、民数記23:11-13

　　　　　　　　**新旧約聖書における『のろい』**

本日のテーマは「のろい」です。漢字で「のろい」を調べますと“呪術の呪（ジュ）”と“呪詛の詛（ソ）”の2種類がありますが、どちらも、なにかしら、おどろおどろしいものが感じられます。聖書流にいえば「悪霊」に属するもののようです。日本でも、古来から、「怨霊（オンリョウ）」という霊があり、日本三大怨霊といえば、菅原道真、平将門、崇徳天皇の三人だそうです。いずれも非業の人生を送られた方で、その「うらみつらみ」が霊となってこの地上に災いをもたらす、という話です。奈良、平安時代の政治統治者に求められた最大の使命は“怨霊の働きを抑えること”であった、と言われることがあります。それだけ、この怨霊の働き、即ち、「のろい」は強力である、と信じられていた訳です。現代は科学の時代と言われ、もう怨霊の話など過去のことだと思いきや、あにはからんや、この類が大はやりです。インターネットで検索すると、「呪いの代行業」さえ見られます。いまでも陰で流行しているのかもしれませんが、高校生の女の子の間で、「安倍の清明」の名による願掛けの類がありました。お茶断ちによる、恋の成就の祈願とか、呪いによる殺人のためのお百度参り、とか実に多種多様な「のろい」の業（わざ）があります。

　クリスチャンは、キリスト教はこんな馬鹿げた「のろい、怨霊」の類とは無縁だと思いがちです。それにしては新旧約聖書に「のろい」の言葉が多数出てきます。「のろい」「のろう」「のろう者」「のろわれた者」「のろいの誓い」等々の言い方で登場致します。もし、新旧約聖書の「のろい」が怨霊ののろいと類似のことだとすると、新旧約聖書もそんじょそこらの怨霊解説本と同じものになってしまいます。今日は、“そうではない。新旧約聖書なかでも旧約聖書で使用されている「のろい」と訳されている言葉は多様であり、そのそれぞれが、「神と人」の関係におけるある関係を示しており、怨霊ののろいの類とは無縁である”ことを申しあげたい、と思っています。もちろん、聖書にも、「怨霊ののろい」を意味している言葉もありますが、その使用例は少なく、かつ、否定的意味で使用されています。日本語で「のろい」と訳されている部分は英語ではほとんどが「curse」（のろい）と訳されていますが、日本語と同様、みそくそいっしょに「curse」と翻訳され、オカルト的「のろい」と区別がつかなくなっています。

新約聖書のギリシャ語にしても複数のヘブル語の「のろい」が一つの単語になっており、結局、聖書の「のろい」の原初的意味まで遡ろうとすると、対応するヘブル語の単語にまで行きつかざるを得ません。主イエスは日常用語としてはアラム語を使用していたのではないか、と推測されていますが、アラム語はヘブル語と同一系統の言葉で、共通する単語も多数あります。従って、新約聖書の場合も対応ヘブル語を見れば、「のろい」の意味合いの相違を知ることができる、と考えられます。以下では、新約聖書のヘブル語訳の定番のように扱われている訳を使用します。これは19c半ばにドイツの聖書学者デリッツが訳したものです。

　まず採り上げるのはパウロの「のろわれよ」の言葉です。第一コリント、16:21-24をお読みします。「パウロが、自分の手であいさつを書きます。主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。私の愛は、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべての者とともにあります。アーメン。」とあります。「主よ、来てください」のところは、アラム語が使われており、「マラナタ」という表現で有名です。のろいの言葉のあとが「主よ、来たりませ」はそぐわない感じです。そもそも、あの強靭な精神力を示しているパウロが不信仰者に対し、「うらみつらみ」のことばとも思われるような「のろい」の言葉を言うようなことがあるでしょうか。

このところのギリシャ語は「anathema」と言う言葉です。辞書では「のろいとして聖なる者に捧げられたもの」とあります。いけにえとしての奉献物のことです。この言葉は、中世ローマ・カソリック教会で、破門の時、こののろいの言葉を浴びせる定型語になっていました。ルターもカソリック教会からこの言葉と共に追放されたのです。ルター自身もかの「九十五か条の論題」の第71で「使徒的贖宥の真理に反して語るものには、アナテマと呪いとあれ。」と言っています。そもそもは、初期教会の信条の一つであるニカイア信条に「主の在し給わなかった時があるとい（う者）は、公同かつ使徒的なる教会は呪うものである。」とあることから来ています。主イエスが永遠の方であることを否定する者はいけにえの奉献物とする、という意味です。

　この「anathema」の対応のヘブル語を見るとその意味がはっきりしてきます。「he:rem」です。これは新改訳の旧約聖書では「聖絶」と訳されている言葉です。ヨシュア記などで皆殺しの意味で使われている言葉です。協会共同訳では、「滅ぼし尽くすもの」「滅ぼし尽くす献げもの」というように訳されています。「滅ぼし尽くす」の意味と「奉献物」の意味を両方持った言葉とされています。主の戦い、において勝利し、敵の命を滅ぼし、それを主なる神への奉献物とする、ということです。奉献物とするのは、主が戦われる聖戦の戦利品だからです。そもそもの意味は「滅ぼし尽くす」ということです。聖戦は神と神の戦いですから、ここで滅ぼし尽くすべきものは異教の神々の霊の働き、即ち「命（いのち）」です。物理的に、すべての生物を殺す、皆殺しを意味するものではありませんが、異教の神々の霊を滅ぼすことの象徴行為として、敵の指導者を殺すことは、求められていたと思われます。そして、重要なのは、その神々の祭儀を停止することです。この「he:rem」の「滅ぼし尽くす」の意味が「anathema」という言葉として、継承されていったのです。

　もう一点、注意点は、第一コリント16:22のヘブル語での表現についてです。ギリシャ語では「anathemaであれ」という表現で、be動詞の命令形です。しかしヘブル語では未完了形という表現方法です。この未完了形は時制的には未来の意味に使われる表現です。ヘブル語にも命令形というのもありますが、未完了形が命令の意味で使用されるのが通常です。イスラエル信仰においては、人間が他の人間に命令することはありえず、真の命令は神からの命令のみであり、神がそのようにするに決まっている、というニュアンスです。

　これらのことを前提にパウロの言葉を見直すと、「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ」のところは、意訳で「主イエスを愛さない者は、主なる神がこの者を滅びの者とされることは確実である」と訳することができるでしょう。これならパウロの言葉としてすんなり入ってきます。「のろい」のことばの第一はヘブル語の「he:rem」、ギリシャ語の「anathema」であり、滅びの者とされることです。即ち、救いの道を閉ざされる、ということで、オカルトじみた話とは関係ありません。救済論の領域の話です。

　次はルカ福音書での「のろい」の言葉です。ルカ5:27-28をお読みします。「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。/あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。」とあります。有名な愛敵の言葉のあとで「祝福」から排除された者として使用されています。ギリシャ語は「kataraomai」です。この言葉はギリシャ語としては、「のろう」の意味で最も一般的に使用される単語です。いくつかのヘブル語の「のろい」がギリシャ語訳ではこの言葉になっています。ここでのヘブル語は「qa:lal」です。本来は小さくする、無視する、軽く扱う、の意味ですが、ここから、軽んずる、卑下する、侮辱する、侮る、冒涜する、の意味合いの言葉となっていきます。神冒涜は律法により死罪です。これに準じて、父母を侮辱する者も死罪です。ルカ福音書の「あなたをのろう者を祝福しなさい」という個所は、「あなたを侮辱する者に祝福を与えなさい」と言う意味になります。

これは神と人との関係でみると、人から神、という下から上の関係における用法ですが、同じ言葉が上から下、神から人への関係に使われますと、「祝福なき者とされる」の意味になります。イスラエル信仰において決定的に重要な「祝福」の反対語としての意味として使用されます。「祝福」はアブラハムによる子の祝福に始まり、現代のキリスト教会においては礼拝の最後における「祝祷」に繋がっています。祝福される、ということは子々孫々、神の恵みの下に置かれる、ことを意味していますから、このヘブル語「qa:lal」はこれから排除されることを意味します。この世において、不幸な者とされることを意味することもあります。パウロは律法の下にある者を「のろわれた者」即ち「祝福なき者」としています。律法を守ることこそ神の恵みを引き寄せる方法だ、と考える人々は、結局、自分の力に頼り、神の無限大の力を軽んずる者で、「祝福なき者とされる」と言っているのです。

この「qa:lal」という言葉は旧約ではレビ記において多く使用されています。宗教的意味合いの強い言葉で、イスラエル信仰の基本的なところにある言葉といえます。神を神として礼拝する、ことの反対のこととして使用されています。また神より祝福を受ける、というイスラエル信仰における神の約束、契約の下にあることの反対のこととされているのです。呪術的なのろい、とは無関係な、まさに、イスラエル信仰の根本に反した状態にあることを言っている言葉です。

ヘブル語三番目の「のろい」の言葉は「a:rar」です。ギリシャ語では「qa:lal」と同じ、「kataraomai」です。この派生語「epikatara:tos」も使われています。このヘブル語「a:rar」の使用例として有名なのは申命記27章の「---する者はのろわれる。民はみなアーメンと言いなさい」の個所です。これが12回繰り返されています。おそらく、イスラエル部族の数12に由来することでしょう。申命記27:24-26をお読みします。「ひそかに隣人を打ち殺す者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。/「わいろを受け取り、人を打ち殺して罪のない者の血を流す者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。/「このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。」とあります。この個所は結論的には「律法に従わない者は神の恵みからはずされる」ということを言っています。律法は、神が恵みを与えるための手段としてイスラエルに与えたものです。この律法に留まることにより、神の恵みの下に居続けることができるのです。これらの言葉は、祭司職のレビ人がイスラエルの民に語った言葉であり、神の恵みの下にあることは即ち、祝福された者ですから、「a:rar」は「ka:lal」と同様、祝福された者の反対語としても使われます。文脈において、神の恵みから排除されている、という点に重きがあるのか、選びの民の系譜から排除される、という点に重きがあるのか、の違いと思われます。

祝祷の言葉として第二コリント13:13「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり」という言葉が使われていますが、「主の恵み、神の愛」ですので、誤解を恐れず、これを旧約に引き直すと「主ヤハウェーの恵み、神エロヒームの愛」ということになります。旧約の表現で「ヤハウェー・エロヒーム」は「主なる神」とか「神である主」と訳されていますが、この惠（恵み）は主ヤハウェーに由来するものです。もちろん、それは、神エロヒームの愛の表現の方法である、という関係にあります。日本人の感覚から言うと「神の愛」も「神の恵み」も同じように思えますが、イスラエルの民にとってはヤハウェーこそ「我らが神」ですから、「主の恵み」、こそ直接、自分たちに影響を与えることなのです。人間一般のことではなく将（まさ）に自分たちイスラエルに関することなのです。選びの民イスラエルの信仰の基本に関連する事柄なのです。新約の時代にあっては、新しきイスラエル、即ち、我々キリスト者に向けられた「恵み」に係ることなのです。この「a:rar」はその恵みが奪われた状態です。

新約ヘブル語訳でこの「a:rar」が使用されている例としてマルコ11:21が挙げられます。「ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」 というところです。主イエスがのろったためいちじくの木がかれたという、いちじくの木の譬えのところです。これはイスラエルの民は罪のため、もはや選びの民とは言えない、ということの譬えとして挙げられる個所です。主イエスからの恵みがもはやこのいちじくの木には与えられない、ということです。旧約では「a:rar」は61回使用されており、「qa:lal」についで多い「のろい」と訳されている言葉です。「主の恵み」と密接な関連を持つ言葉であり、やはり、呪術的、オカルト的のろい、とは無関係です。

第四のヘブル語「のろい」の言葉は「a:la:」です。ギリシャ語訳は「ara」です。動詞形は「araomai」です。新約聖書のヘブル語訳ではローマ書3:14「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」の「のろい」の個所です。ここは、人間の罪の深みについて語ったところであり、詩編10:7の引用です。旧約での「a:la:」の使用を見てみます。申命記29:12-15をお読みします。「あなたが、あなたの神、主の契約と、あなたの神、主が、きょう、あなたと結ばれるのろいの誓いとに、入るためである。/さきに主が、あなたに約束されたように、またあなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われたように、きょう、あなたを立ててご自分の民とし、またご自身があなたの神となられるためである。/しかし、私は、ただあなたがたとだけ、この契約とのろいの誓いとを結ぶのではない。/きょう、ここで、私たちの神、主の前に、私たちとともに立っている者、ならびに、きょう、ここに、私たちとともにいない者に対しても結ぶのである。」とあります。この「a:la:」の本来の意味は「誓う」という意味です。神の約束、即ち、聖書的な「契約」と関連を持ったことばです。神の契約から排除される、ことを意味しています。「ala:」は主なる神の誓い、約束から外されることを意味しています。人から神への言葉としての「誓い」は主なる神への全き、従属の誓いとなります。

申命記29:12では主が「のろいの誓い」をする、と言われています。これは、偶像礼拝者等は主の契約の埒外に置くことを神は誓っている、ということと考えられます。契約の民にはなりえない、ということを「a:la:」で表現しています。契約の民ではなくなることは主なる神のもろもろの事柄から排除されると言うことでもあります。聖書における契約は神の約束を意味しているのであり、対等な関係で契約を結ぶと言う意味ではありません。主なる神の一方的な約束です。これがイスラエルに対しては恵みの約束、祝福になります。偶像礼拝者や異邦人に関してはこの逆の約束「のろいの誓い」が与えられることになります。具体的な効果としては主の恵みから外されるとか、祝福が与えられず不幸に陥る、というような他の「のろい」のヘブル語と共通しますが、主なる神とイスラエルの契約と関連を持っているところが違います。

新約聖書ヘブル語訳で「a:la:」が使用されている箇所がもう一か所あります。マタイ25:41です。「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』と言われています。この「のろわれた者ども」は旧約聖書の引用ではなく、主イエスがたとえ話のなかで王が言ったことの引用です。この部分は、「偶像礼拝者たち」、「異邦人たち」とか、「主ヤハウェーとの契約の下にない者」と置き換えると、王が言ったこととして、すんなり来ます。呪術的にのろいの下にある者の意味ではありません。

以上、のろい、と訳されているヘブル語の4つの言葉を見ました。それぞれ、あえて、言い換えますと、次のようになると思われます。ヘブル語「he:rem」、ギリシャ語「anathema」は、「滅びに定められた者」、ヘブル語「ka:lal」、ギリシャ語「kataraomai」は「侮辱され、祝福なしとされた者」として、ヘブル語「a:rar」、ギリシャ語は同じく「kataraomai」は、「主の恵みの及ばない者」、ヘブル語「a:la:」、ギリシャ語「ara」は「主の契約より完全に外れた人」ということになるでしょう。これらの言葉はいずれもイスラエル信仰の基本にかかわることであり、呪術的な「のろい」とは無関係な言葉です。イスラエル信仰の中心的部分の否定形の意味として使用されている、ということができるでしょう。そのことは旧約聖書及びヘブライ的伝統にある新約聖書における「のろい」の意味の多様さを示しているのです。イスラエル信仰の系譜を反映している言葉です。

旧約には、呪術的な意味でののろい、を指している、と思われる言葉がひとつだけあります。ヘブル語動詞「qa:bab」です。新約聖書ヘブル語訳にこの用例はありません。ギリシャ語訳は一定していませんが主に「araomai」です。これは、ヘブル語「a:la:」のギリシャ語訳「ara」の再帰動詞形です。民数記22,23章に解釈難解なバラクとバラムの物語があります。民数記23:11-13をお読みします。「 バラクはバラムに言った。「あなたは私になんということをしたのですか。私の敵をのろってもらうためにあなたを連れて来たのに、今、あなたはただ祝福しただけです。」 バラムは答えて言った。「主が私の口に置かれること、それを私は忠実に語らなければなりません。」バラクは彼に言った。「では、私といっしょにほかの所へ行ってください。そこから彼らを見ることができるが、ただその一部だけが見え、全体を見ることはできない所です。そこから私のために彼らをのろってください。」とあります。モアブの王バラクがイスラエルの民に対抗するため、メソポタミアの北方に居た有名な占者（せんじゃ）即ち、占いをする者を呼んで、イスラエルをのろってもらおう、と考えたのに、バラムはのろうことをせず、逆にイスラエルを三度も祝福してしまったと、いう話です。奇妙な物語です。

この「敵をのろう」というところが、ヘブル語「qa:bab」です。ギリシャ語では「qa:lal」「a:rar」と同じ「kataraomai」が充てられています。しかし、占い者にたのむ「のろい」ですから、これこそ呪術的な意味での「のろい」です。ところが、何と、イスラエルの民を前にしてはその呪術的な「のろい」＝「ga:bab」が通用せず、祝福となってしまったというのです。祝福なし、の意味のヘブル語は「qa:lal」ですから、イスラエルを真にのろうためには「qa:bab」ののろいではだめで「qa:lal」の、のろいでなければなならない、ということなのでしょうか。イスラエルの民は呪術的な「のろい」とは無関係な民であり、そのような「のろい」の影響は受けない、ということの意味の話だ、と思われます。この物語には、世の中でいう呪い、即ち呪術的なのろいは、主なる神の目から見れば取るに足りないことである、というイスラエル信仰の基本的理念の反映ととらえることもできるように思われます。新旧約聖書とも呪術的な「のろい」については極めて消極的態度を貫いています。

その他、旧約聖書で「のろい」と訳されることがあるヘブル語の言葉があります。最初に上げたヘブル語「he:rem」は「滅びに定められた者」のことですが、文語訳聖書では呪詛（じゅそ）の詛（そ）で「のろわれしもの」として訳されています。これは、聖書の最初の本格的英訳であるKing’sJames訳が「he:rem」を「accursed thing」（のろわれしもの」と訳してあったのを日本語にしたからです。

これ以外に「のろい」と訳されることがあるヘブル語は「za:am」です。そもそもは親が子供を怒る時の言葉で「憤る」と訳されることが多い言葉です。ギリシャ語では「kataraomai」の系列の言葉「katarasmai」です。民数記23:8の口語訳は「神ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。主ののろわない者を、わたしがどうしてのろえよう。」とあり、のろう、が4回もでてきます。ここの前半部分「神がのろわない者」のところは呪術的のろいと先ほど言った、ヘブル語「qa:bab」であり、後半部分「わたしがのろえない」の部分は「za:am」です。ギリシャ語はすべて「katarasmai」です。意訳しますと、“神が呪術をかけてのろう者でもないものを、どうして私が怒り、憤り、のろうことなどできましょうか。”ということになります。新約聖書ヘブル語訳に「za:am」の用例はありませんし、ギリシャ語新約聖書に「katarasmai」の用例もありません。いずれにせよ、「怒り、憤る」の意味であり、これも俗にいう呪術的のろい、とは無関係です。

更にもう一つ。ヘブル語で「na:qab」という言葉があります。これは「冒涜する」の意味の言葉です。レビ記24:11に「そのとき、イスラエルの女の息子が、御名を冒涜してのろったので、人々はこの者をモーセのところに連れて来た。その母の名はシェロミテで、ダンの部族のディブリの娘であった。」という表現があります。「冒涜してのろった」のところは冒涜が「na:qab」、「のろった」が「主なる神の祝福から外された者」の意味の「qa:lal」です。しかしこのギリシャ語訳は「冒涜してのろった」全体として、のろう、の意味で最も一般的なギリシャ語「kataraomai」一語です。このことは「冒涜」と祝福なし、の意味の「qa:lal」の結びつきが強いことを意味しています。神を冒涜するものは永遠に神の祝福を受けられない、ということを意味しています。主イエスはこの罪で十字架にかけられ、「のろわれた者」となられたのです。この「のろわれた者」は、「qa:lal」の名詞形「qela:la:」です。一言、祈ります。

（ご在天の父なる神様、今日は「のろい」のことばから、イスラエル信仰の深みに入ろうと努めてみました。実に多様な「のろい」と訳されたヘブル語の数々が、イスラエル信仰の基本的側面と大きく関連していることを知ることができ感謝いたします。イスラエル信仰が呪術的「のろい」と無縁なことも知りました。この世は多くの呪術的「のろい」が大流行（おおはやり）の世界です。Post-Truthという言葉さえあります。私たち、新しいイスラエルはイスラエル信仰の基本に立ち返り、主イエスの言葉に立ち、真に、主なる神の祝福と恵みの下でで、不動の信仰に立つことができるよう導いてください。主イエスの御名により祈ります。アーメン。）